胡瓜植えぬ家

キュウリの植えられない家だども、そのいわれだば、俺なんも聞いたことねどもしゃぁ、隣部落の魔面に二っつ三つ下の妹がいて、いずれにしても、同じ年に父も母も亡ぐなったったものねぇ。同じ年にねぐなったために、「今度、代替わりなったんて、んがんど胡瓜植えれ」って、妹しゃべってあったじや。んだばってしぇー、そういう難しいことあったり、何だすれば、誰責任負うったて、「そういうこと、せだってな」って。それで俺も振り払って植えねんで、いまだかって植えねんでいらじ。俺の息子も植える気持ちもねがべし、オラまだ植えんなって言わんて植える気持ちもね。

だんて、どういう意味でそうなったんでらぁ、それだばわがんねでば。ただ、胡瓜植えれば、水難の相あらんて植えるなって、そう言われてらって。河童に取られるってね。そうして、胡瓜、貰っては喰ってもいいし、買って喰ってもいいども、わいの人かねに(食べる前に)、まず河童さ上げ申して、それからでねば、胡瓜喰ってはなんね、それまでしゃべられてたってば。

意味、なんもわかねやつ。何が話でがあったんだかしぃ、覚えてる人、オラより十もよげだ人でねがったが。その人「あいやぁ、んがの家でしぇ、馬、川さ入に行ったっきゃぁ、河童、馬の尾っぱさ、捕まってきて、河童どご助けてやったどやぁ」って、こういう話、ちょこっと聞いたどぎあったじぃ。何の話のついで、であったんだが、胡瓜のこどしゃべっていたついでであったんだが、意味当時わがらね話、べろっと聞だじやぁ。まだわらしだために、深げぐも掘り下げて聞だわけでもねし、いずれ胡瓜は植えるな、ってそう言われてきたじ。そのついでにであったんだがしゃ、「おめの家でしゃ、馬、川さ入れに行ったば、馬のしっぽさ河童捕まってきて、河童どご助けてやった」、こういう話聞いたじ。こうやぁったげ、迷信だもんなんだぇぁ、なんなんでぇぁ、植えなってば、植えねで、守ったもんだべしねぇ。年寄りの話、みんな信心してねぇ。

おいの別家でだば、カボチャ植えられねった。カボチャ、今度、別家が二ツ井さ越えて行ったために、婆さんこへだ(作っ

た)わけだ。婆さん植えたっけ、その年婆さん死んだっけ。んだんて、「植えんなってば、植えねばええばって」ってこういう話したじ、俺。んだんて、そういうことあるために、俺、胡瓜もやっぱり植えにゃあじよ。

そんでも、なに、植えてば植えればえし、時代だっけ違ってしまってそれえ、まずはぁ、悪りことあれば、じっちゃ話信心せば植えねかもしれねし、また孫の代になったら別かもしれねし。オラ、かまわねはぁ。どうして、仏道も神道なってみたり、その人の宗門、好き好きってばいいげ。んだために、人の信心だっけ、止めたってどうするんだげ。

佐藤新(常盤・大正元年生・85歳)

〈解説〉

昔話までには熟していない話。佐藤家にとっての禁忌はキュウリを植えてはならないということであった。代替わりになったからといってその禁忌を破るつもりはない。もしなにか不幸なことが起きれば大変だという警戒心が先に立つのである。キュウリを植えれば水難を蒙るという。もし植えれば河童に取られてしまうという。架空の動物である河童はさまざまな話題を提供しているが、水辺にきた馬の尻尾に食い下がって、馬を水中に引きずり込もうとして、逆に陸に引き上げられて痛い目に遭うという話がある。そのことから考えると、ここで「河童とこ助けてやった」というのは、いったんは川から引きずりあげたが、助命を懇願する河童を逃がしてやった、ということだろう。ふたたびこのような事件が起きないように、キュウリを植えないという誓いをこの家では立てたのであろう。別家でカボチャを植えないということも、不幸につながるというその家の禁忌なのである。しかしこの話者は、そういう禁忌は迷信のようなものだから、時代の移り変わりで変化していくものと思っている。